

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・XII

平成10年3月

熊取町教育委員会

はしがき

昭和25年に文化財保護法が制定され、以来約半世紀が過ぎ、今日では国民全体に文化財に限らず、歴史への関心は深まり、歴史ブームとさえ言われるようになりました。また各地における遺跡の発掘は、歴史事実解明のため多数の一般市民までもが参加できるような機会も増え、さらにその成果は新聞等のマスコミに毎日のように報じられるようになりました。特に近年の発掘調査成果は目覚しく、今年1月に発表された奈良県天理市の黒塚古墳では多量の銅鏡が発見され、邪馬台国論争に一石を投じるものとなりました。

しかしその一方、住宅地開発や道路の建設などが盛んとなり、遺跡を保存することが困難になるという事態にも迫られています。本町においても例外ではなく、毎年50件にも及ぶ発掘調査等を実施しており、遺跡の記録・保存に努めています。いずれも小規模な調査が多く、また新聞紙上を賑わす様な発見はありませんが、こういった地道な調査の積み重ねによって徐々に見えてくる真実と言うものがあり、それが地域史解明の一助となるものと確信しています。

本書は、平成9年度国庫・府費補助事業として実施した調査成果を概要報告書としてまとめたものです。熊取の歴史のための資料として役立てていただければ幸いです。

最後に現地での発掘調査にあたってご理解とご協力をいただきました上地所有者ならびに関係者各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

熊取町教育委員会

教育長 甲 田 太三郎

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が平成9年度国庫・府費補助事業として計画し、社会教育部文化課文化財係が実施した熊取町遺跡群発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会社会教育部文化課文化財係職員前川 淳、永井 仁を担当者として、平成9年4月1日に着手し、平成10年3月31日をもって終了した。
3. 本書は、報告書の作成の都合上、平成9年4月1日から同年12月29日までの発掘調査成果及び、平成8年度事業で昨年度報告できなかった平成9年1月5日から同年3月31日までの発掘調査成果を掲載することとした。
4. 本書における図面の標高は、T. P.（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
5. 本書における図面の土色は、『新版標準土色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
6. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の方々の参加を得た。明記して感謝の意を表する。

石松 直、関井澄子、村田岳哉、山本恵子、伊庭 勉、宇沢克之、太田敏治、辻野 勝、松原仁司
7. 本書の執筆は、各担当者が行い、目次に文責を示した。また編集は永井が行った。

目 次

第1章 はじめに	(永井) 1
第2章 地理的環境と周知の遺跡	1
第1節 地理的環境	(永井) 1
第2節 周知の遺跡	(永井) 3
第3章 調査成果の概要	4
第1節 東円寺跡96-12区の調査	(前川) 4
第2節 久保城跡97-1区の調査	(前川) 6
第3節 東円寺跡97-3区の調査	(前川) 8
第4節 降井家屋敷跡97-1区の調査	(永井) 10
第5節 東円寺跡97-5区の調査	(永井) 12
第6節 久保B遺跡97-1区の調査	(永井) 14
第7節 大久保C遺跡97-1区の調査	(永井) 16
第8節 東円寺跡97-13区の調査	(永井) 18
第4章 おわりに	(永井) 22

第1章 はじめに

平成9年度における、文化財保護法に基づく土木工事等による埋蔵文化財の発掘の届出・通知件数は42件（平成9年12月29日現在）であり、昨年の同時期は37件であったことから増加を示している。

本書では平成9年度国庫・府費補助事業として実施した、東円寺跡3件・降井家屋敷跡1件・久保城跡1件・久保B遺跡1件・大久保C遺跡1件、平成8年度事業で実施した東円寺跡1件の以上8件の発掘調査の成果について概要を報告する。

平成9年国庫・府費補助事業発掘調査一覧表

遺 跡 名	所 在 地	申 請 者 名	申 請 面 積	調 査 年 月 日
*東円寺跡 96-12区	紺屋152	阪上春造	291.32m ²	19970304～19970306
久保城跡 97-1区	久保12	野間軍清	331.78m ²	19970507
東円寺跡 97-3区	五門1151-5	吉岡均	61.67m ²	19970520
降井家屋敷跡 97-1区	大久保中2-17-1	田中良助	534.27m ²	19970630～19970704
東円寺跡 97-5区	紺屋2-2091-7	今城博文	124.44m ²	19970707～19970708
久保B遺跡 97-1区	久保1135-1	池端太源	267.63m ²	19970821
大久保C遺跡 97-1区	大久保34-2	北川正剛	288.57m ²	19971022～19971023
東円寺跡 97-13区	野田2136-6	桑鶴憲一	201.83m ²	19971209～19971211

(※は平成8年度)

第2章 地理的環境と周知の遺跡

第1節 地理的環境



第1図 熊取町の位置

熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である（第1図）。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.19km²を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。

地域別に見ると、町南部においては泉南地域の基本山地となる和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

町域に水源を持つ河川は見出川・雨山川・住吉川の3水系が存在している。3河川とも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部が他市域を流れていることに加えて、本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることが出来る（第2図）。

熊取町遺跡分布図



第2図 熊取町における遺跡分布図

第2節 周知の遺跡

周 知 の 遺 跡 一 覧 表

遺 跡 名	種 類	時 代	地 目	立 地	主 な 成 果 等
降 井 家 書 院	建造物	室町～江戸	宅 地	半 地	国指定重要文化財
中 家 住 宅	建造物	室町～江戸	宅 地	平 地	重文・江戸期から明治期頃の陶磁器等出土
来 迎 寺 本 堂	寺 院	鎌 倉	宅 地	丘陵腹	重文・15～6世紀の陶磁器や畳作遺構を検出
池 ノ 谷 遺 跡	散布地	旧 石 器 水 田	宅 地		
甲 田 家 住 宅	建造物	江 戸	宅 地	平 地	
東 門 寺 遺 跡	寺院跡	繩文～江戸	宅 地	平 地	繩文～江戸の複合遺跡・寺院については不明
城 ノ 下 遺 跡	城郭跡	室 町	宅 地	丘 陵	
成 合 寺 遺 跡	墓 地	室 町	烟 地	丘陵腹	14世紀代の600基以上の土壙墓群等検出
高 藏 寺 城 跡	城郭跡	室 町	山 林	山 顶	土堤・堀切等の構築物を確認している
雨 山 城 跡	城郭跡	鎌 倉	山 林	山 顶	月見ノ亭・馬場・千畳敷の地名が残る
五 門 遺 跡	散布地	古墳～江戸	宅 地	丘 陵	須恵器等を採取するも現在消滅
五 門 北 古 墳	古 墳	古 墳	宅 地	丘 陵	古墳参考地、現在消滅
五 門 古 墳	古 墳	古 墳	宅 地	丘 陵	古墳参考地、現在消滅
大 浦 中 世 墓 地	墓 地	室 町	墓 地	平 地	亨徳4年銘(1445)の五輪塔の地出土
久 保 城 跡	城郭跡	鎌 倉	水 田	平 地	的場・矢の倉等の字名、瓦器片多数出土
山 ノ 下 城 跡	城郭跡	鎌 倉	宅 地	平 地	
大 谷 池 遺 跡	散布地	古墳～江戸	池	平 地	
祭 礼 御 旅 所 跡	祭礼跡	室 町	山 林	丘 陵	五門・紺屋共同墓地
正 法 寺 跡	寺院跡	鎌 倉	宅 地	丘 陵	
小 垣 内 遺 跡	寺院跡	江 戸	道 路	丘 陵	毘沙門堂跡、現在消滅
金 刚 法 寺 跡	寺院跡	室 町	宅 地	平 地	大森神社神宮寺、現在消滅
鳥 羽 巍 城 跡	城郭跡	室 町	山 林	丘 陵	
幕 ノ 谷 遺 跡	寺院跡	室 町	山 林	丘陵腹	
花 成 寺 跡	寺院跡	室 町	山 林	丘 陵	
降 井 家 住 敷 跡	屋敷跡	室町～江戸	宅 地	半 地	屋敷地を区画する溝や近世の陶磁器等出土
大 久 保 A 遺 跡	散布地	江 戸	宅 地	平 地	
下 高 田 遺 跡	条甲跡	鎌 倉	田	平 地	
大 久 保 B 遺 跡	集落跡	弥生～江戸	宅 地	平 地	弥生末～古墳初中心の遺物出土
紺 屋 遺 跡	散布地	古墳～江戸	宅 地	平 地	奈良～平安期の河川跡検出
白 地 谷 遺 跡	散布地	室町～江戸	田 谷		
大 久 保 C 遺 跡	散布地	室町～江戸	宅 地	平 地	
千 石 堀 城 跡	城郭跡	室 町	山 林	丘 陵	天正年間(1573～92)の雜賀衆徒の城跡
口 無 池 遺 跡	散布地	平安～江戸	宅 地	平 地	平安末～鎌倉初の遺構・遺物検出
大 久 保 D 遺 跡	散布地	鎌倉～江戸	宅 地	半 地	
大 浦 遺 跡	散布地	鎌倉～江戸	宅 地	半 地	13～14世紀の瓦器等出土
久 保 A 遺 跡	散布地	鎌倉～江戸	宅 地	平 地	
大 久 保 E 遺 跡	集落跡	弥生～江戸	宅 地	平 地	弥生末～古墳初の遺物多数出土
久 保 B 遺 跡	集落跡	鎌倉～江戸	宅 地	平 地	13～14世紀の瓦器等出土
中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町～江戸	宅 地	平 地	近世以降の陶磁器等多数出土

第3章 調査成果の概要

第1節 東円寺跡96-12区の調査

調査地 紺屋152

調査期間 平成9年3月4日～3月6日

位置と環境 東円寺跡は熊取町の北西部の野田に所在し、熊取町役場付近一帯に拡がる、町内最大の遺跡であり、地形的には、大井出川（住吉川）の右岸域に形成される低位段丘上に立地している。遺跡名における「東円寺」は、文献により元来「東曜寺」と称していたことが窺え、平安時代末期頃の軒丸・軒平瓦等が出土している。しかし今日まで、直接寺院にかかる遺構等は検出しておらず、伽藍配置等は全く不明である。また近年の成果により、绳文時代の石器や奈良時代、中世の掘立柱建物等が確認されるなど、複合遺跡として知られるようになっている。

今回の調査地は東円寺跡の北西部に所在しており、小字名は大開キである。

また本件は、平成8年度事業で実施した調査で、昨年度報告できなかった分である。

調査内容 調査は個人住宅の新築工事に伴うものであり、調査地に2ヶ所の調査区を設定し、人力掘削により実施したが、包含層、遺構、遺物等は一切検出することは出来なかった。

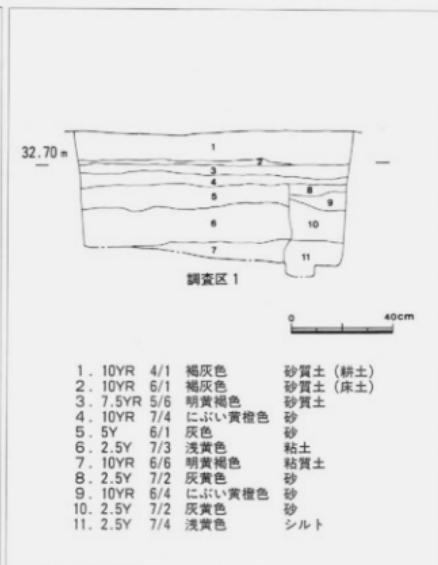
小結 当地は既に市街地化しており、削平と搅乱が繰り返されているようである。また地山面は谷状地形に頻見される砂と粘土の重層が観察され、建物等が存在した可能性は少ないものと思われる。



第3図 調査地点位置図(S=1/2,500)



第4図 調査区位置図



第5図 調査区土層断面図

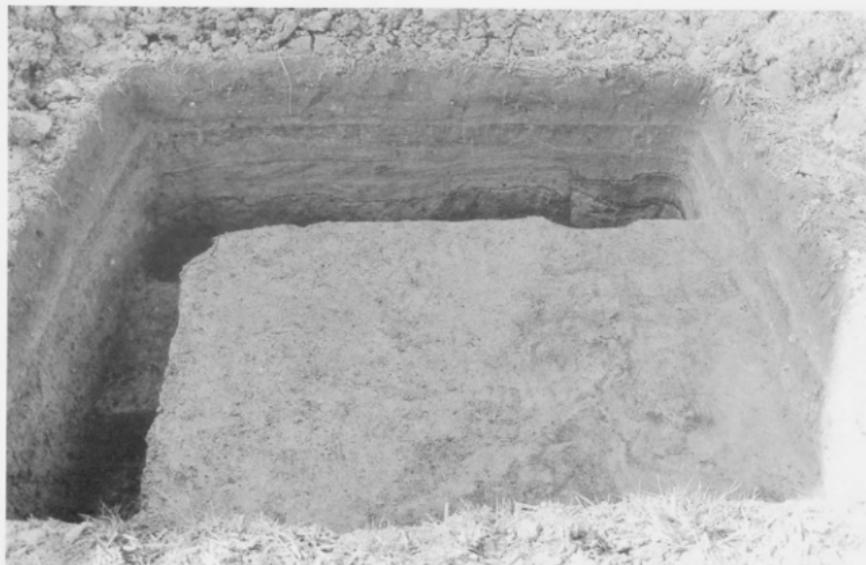


写真1 調査区1全景

第2節 久保城跡97—1区の調査

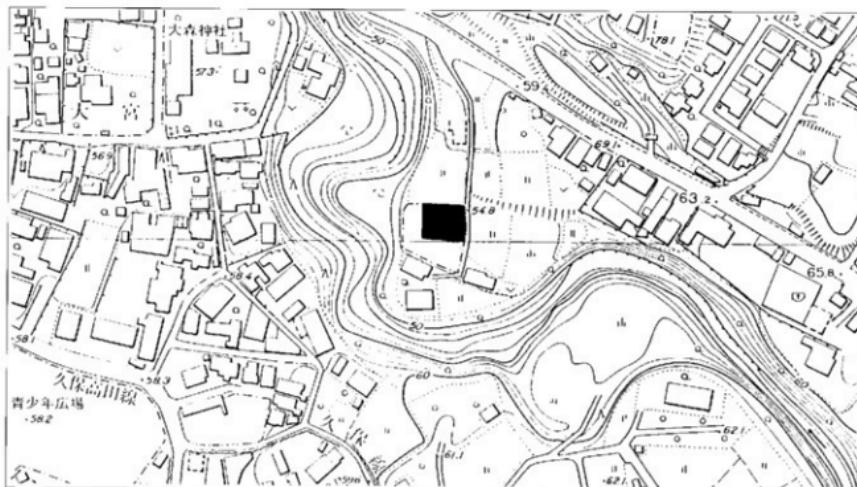
調査地 久保12

調査期間 平成9年5月7日

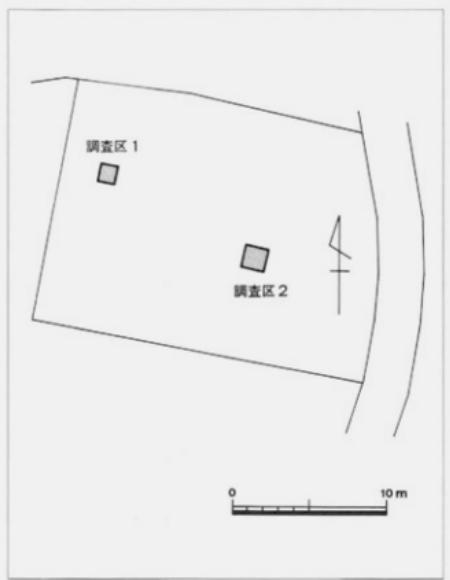
位置と環境 調査地点は見出川の右岸部の比較的急峻な傾斜地を削平し開墾して水田となっているが、状況からして古くから積極的に開発された場所とは思えない。但し見出川を挟んだ真向かいには大森神社が鎮座しており、また今回の調査地点と同じ右岸部の丘陵上に存在する現在の妙見寺付近には、建武地蔵と呼ばれる石造仏が安置されているなど、周辺一帯には中世以来何らかの営みのあった場所である。また小字名は「矢の倉」となっているようで、あたかも中世の城が存在していたかのようであるため、調査も慎重に行わなければならなかった。

調査内容 調査は2ヶ所の調査区を設定し、人力掘削により実施した。両調査区とも上から順に現代の耕作土①、床土②が観られ、直下に削平された地山③が観察できた。この地山面は完全に削平されており表面になんら遺構を確認することはできない。また上器などの遺物を検出することはできなかった。早々に第8図のように調査区の壁面を略図に表現し、また調査区の位置を平板作業によって平面図に表し、他に写真2のように、報告書用の35mmの白黒フィルムろ保存用の35mmのカラーリバーサルフィルムで状況を撮影した。また開発者の希望により埋め戻しを行わず調査を終了した。

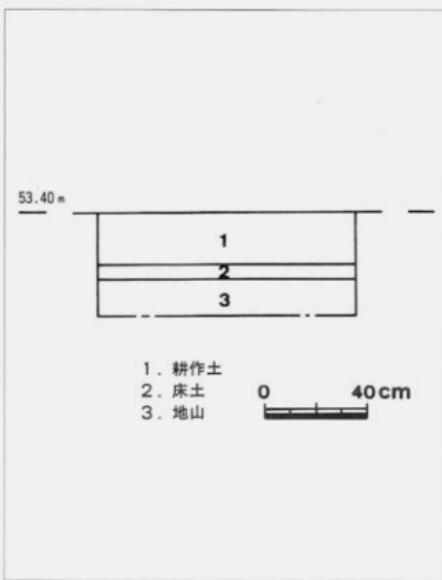
小結 近代以降に水田が営まれる際に削平を受けている為、旧状を窺い知ることはできないが、引き続き周辺の調査を断続的に行い、久保城跡のひろがりなどを把握することに努めたい。



第6図 調査地点位置図 ($S=1/2,500$)



第7図 調査区位置図



第8図 調査区層断面図



写真2 調査区2全景

第3節 東円寺跡97—3区の調査

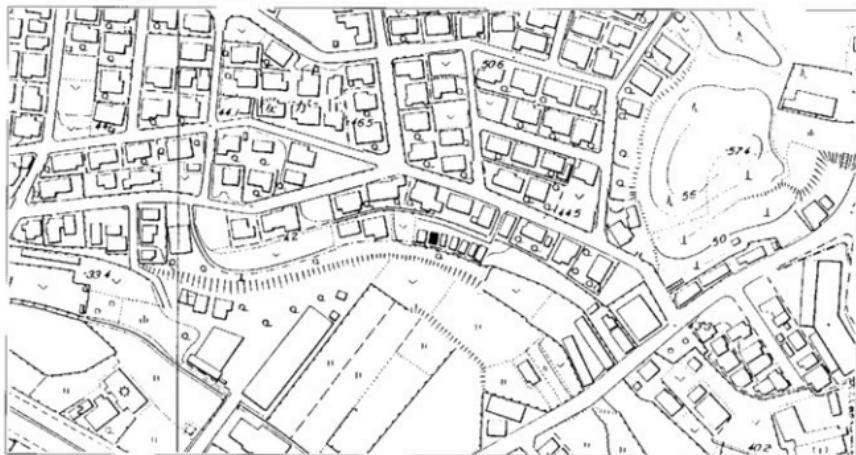
調査地 五門1151—5

調査期間 平成9年5月20日

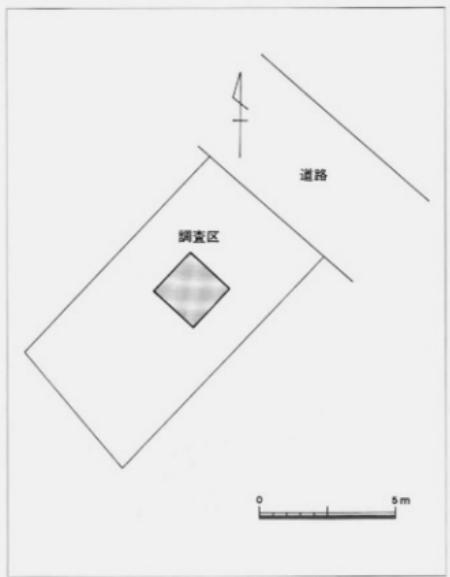
位置と環境 周辺一帯は昭和50年代前半期頃に開発された住宅地で、熊取町役場のある野田地区の中心の平坦地に北側から迫る低丘陵の先端部分にあたっている。平安時代末期から鎌倉時代初期頃に創建されたと考えられる東曜寺（江戸時代から東円寺と呼ばれたらしい）の存在した熊取町役場周辺からは約500m程の距離があり、付近から遺構・遺物がほとんど発見されていないことから、調査地点を含む付近は東円寺自体を構成していた建物などが存在する可能性は少ないと考えられる。但し現在のところ東円寺の屋根を飾った瓦を製作した窯跡などは一切発見されていないので、野田以北にある低丘陵地帯は今後も注意しなければならないであろう。なお当地は長坂という小字が残されている。

調査内容 調査地点の面積が狭いため第10図のように中央部分に1ヶ所のみ調査区を設定して機械掘削によって調査を進めた。国庫補助対象の発掘調査については普段は外業作業員数名による人力掘削によって行っているが、今回調査地点は、旧住宅のコンクリート製の床が残存しており機械掘削でなければ掘削できないことや、外業作業員がうまく確保できなかったこと等の諸事情によって機械掘削を実施したものである。

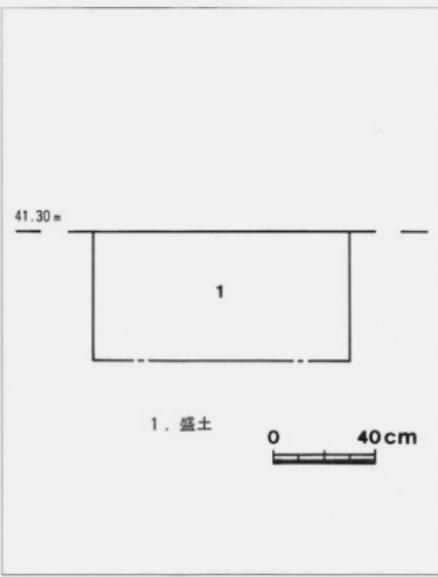
小 結 丘陵端部ということもあり、過去の住宅開発の際大きく盛土を伴う造成が行われており、東円寺をはじめとする中世以降の遺構は確認できない。今後も周辺で調査例を増やし、遺跡の拡がりを把握する必要があるだろう。



第9図 調査地点位置図 (S=1/2,500)



第10図 調査区位置図



第11図 調査区土層断面図



写真3 調査区全景

第4節 降井家屋敷97-1区の調査

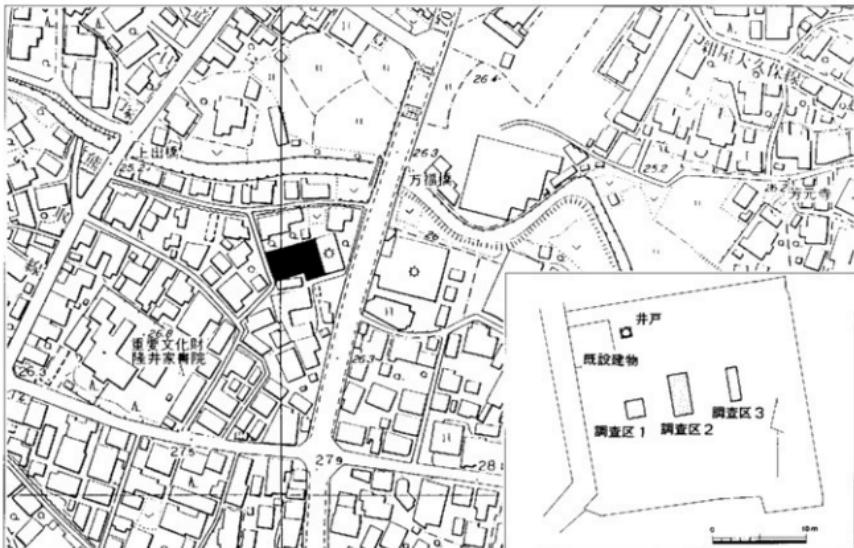
調査地 大久保2-17-1 他1筆

調査期間 平成9年6月30日～7月4日

位置と環境 降井家屋敷跡は熊取町の北西部、大久保に位置し、大井出川（住吉川）の右岸域に形成された低位段丘上に立地している。降井家は当地方の旧豪であり、当家所蔵の天保6年（1835）作成の屋敷図によれば、2500坪の敷地に広大な邸宅を構えていた。江戸時代初期に建てられたといわれる書院は重要文化財に指定されている。これまで当遺跡の調査では、屋敷地を区画すると思われる溝を検出し、17世紀から18世紀代の陶磁器等が出土している。また今回の調査地は現屋敷の東部に位置し、小字名は下浦である。また上記の屋敷図では敷地の範囲外である。

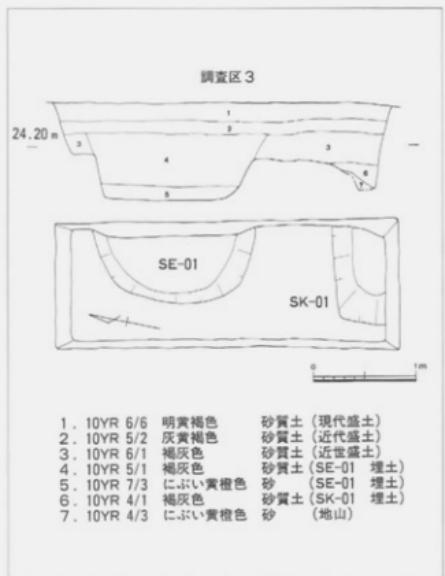
調査内容 調査は個人住宅の建て替えに伴うもので、3ヶ所の調査区を設定し、人力掘削により実施した。近世面、中世面の2面を確認し、近世面においては井戸跡1基、土壌1基を検出し、18世紀末期以降の陶磁器片、瓦等が出土した。井戸は非常に浅く水が湧いていた様子は窺えず、井戸ではなく埋桶等の用途も考えられる。また中世面からは土壌1基を検出し、瓦器片が出土している。これらの下層は、砂礫上と粘土が交互に混ざりあう層が存在し、これは当地の北約50mの所を流れ住吉川（大井出川）が、中世以前に起こした氾濫などによる土砂が堆積しているようである。

小結 今回の調査で僅かではあるが近世の遺構、遺物を検出したが、屋敷地の外郭施設等は検出しており、降井家屋敷との関連は不明である。

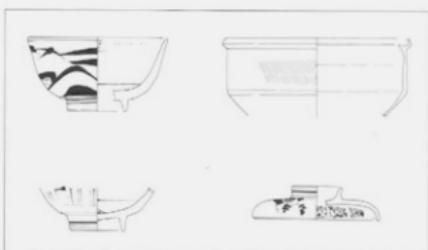


第12図 調査地点位置図(S=1/2,500)

第13図 調査区位置図



第14図 調査区2平面図と土層断面図



第15図 出土遺物実測図(S=1/4)

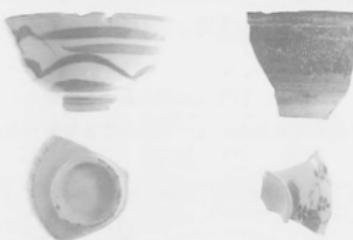


写真 出土遺物



写真5 調査区2全景



写真 調査区2 SK-1



写真7 調査区3全景



写真8 調査区3 SE-1

第5節 東円寺跡97—5区の調査

調査地 緝屋2-2091-7

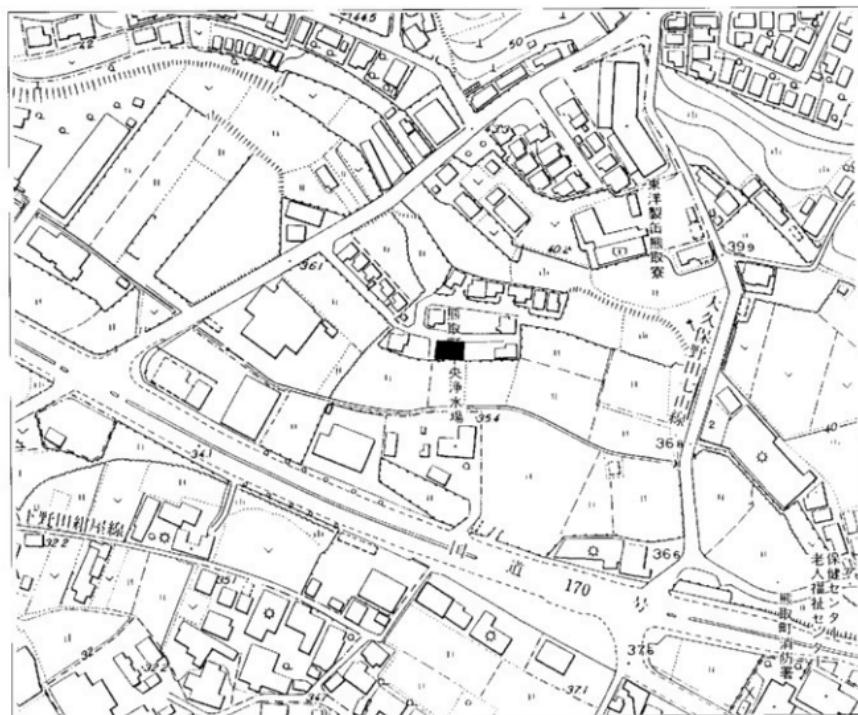
調査期間 平成9年7月7日～7月8日

位置と環境 本調査地は、遺跡の北西部に位置し、遺跡の中央全体を東西に走る、埋積谷の北側の

小高い丘陵上に立地している。遺跡の北西部は、旧来丘陵地であるが、近年の宅地開発により大幅な改変が進んでいる地域である。この周辺では狭小ではあるが数度にわたり調査を実施しているが、ほとんどで削平が認められ、これまで明瞭な埋蔵文化財は確認されてはいない。

調査内容 本調査は個人住宅の増築に伴うもので、調査地に1ヶ所の調査区を設定して、人力掘削により調査を実施した。確認した土層は、旧耕作土、床土とその直下で地山に至るという状況であった。

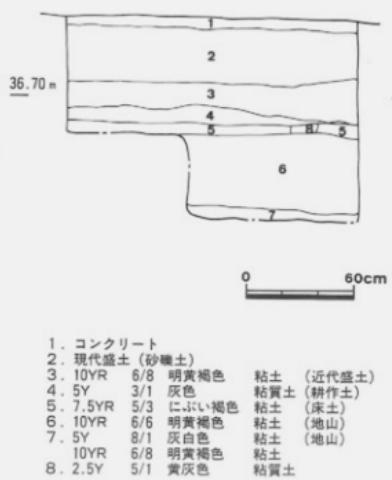
小結 旧来丘陵地における田畠ということで、平滑に削平しているようであり、埋蔵文化財と認められるものは一切検出できなかった。



第16図 調査地点位置図 ($S=1/2,500$)



第17図 調査地点位置図



第18図 調査区土層断面図



写真9 調査区全景

第6節 久保B遺跡97—1区の調査

調査地 久保1135-1 他3筆

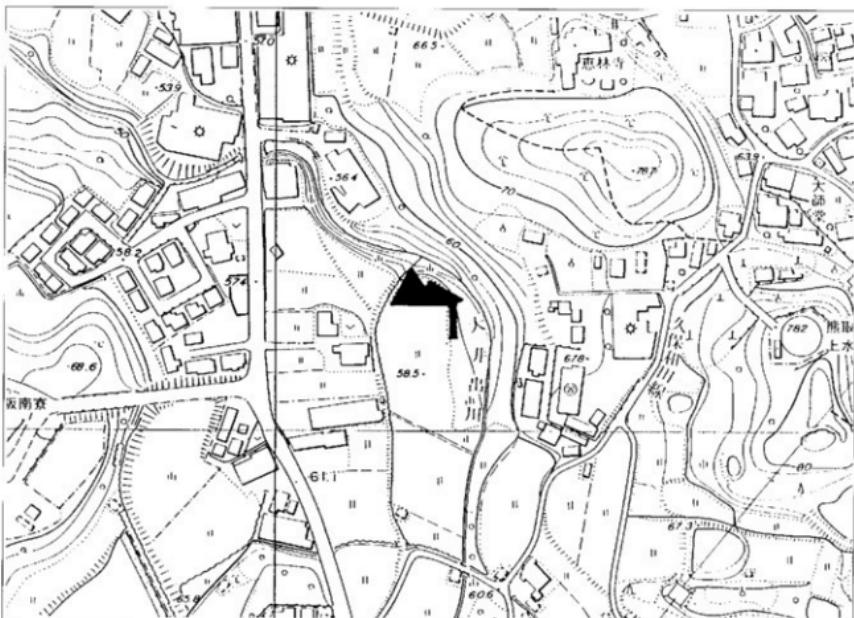
調査期間 平成9年8月21日

位置と環境 久保B遺跡は熊取町の西部に位置し、大井出川の左岸域に立地している。平成元年の調査で新規発見された遺跡であるが、これまで調査例が少なく、遺跡の範囲、性格、年代等は今のところ不明確な部分が多い。しかし本遺跡の周辺には、久保城跡、鳥羽殿城跡といった、中世城郭跡に囲まれており、鎌倉時代から室町時代の瓦器等の土器片や掘立柱建物等が多数検出されており、本遺跡においても、それらに関連する遺構、遺物の存在が予想される。

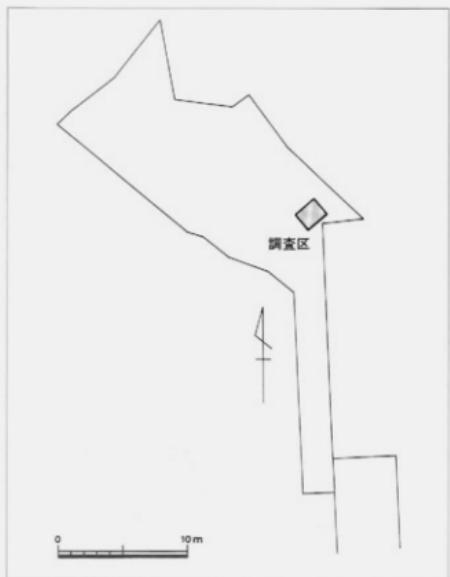
今回の調査地点は遺跡の東端大井川から5mと離れていない地点である。また当地は戸垣外という小字名が残されている。

調査内容 調査は個人専用住宅の新築に伴うもので、調査地に1ヶ所の調査区を設定して、人力掘削により実施した。当地は大井出川の河川護岸工事による盛土造成を行っているようで、その盛土を確認するのみであり、埋蔵文化財は一切検出できなかった。

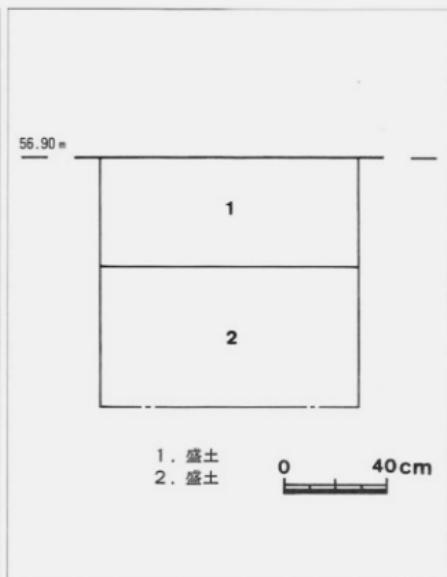
小 結 今回新たな知見は得られなかったものの、今後重要な埋蔵文化財が発見される可能性は高く、注意する必要のある地域である。



第19図 調査地点位置図($S = 1/2,500$)



第20図 調査区位置図



第21図 調査区土層断面図

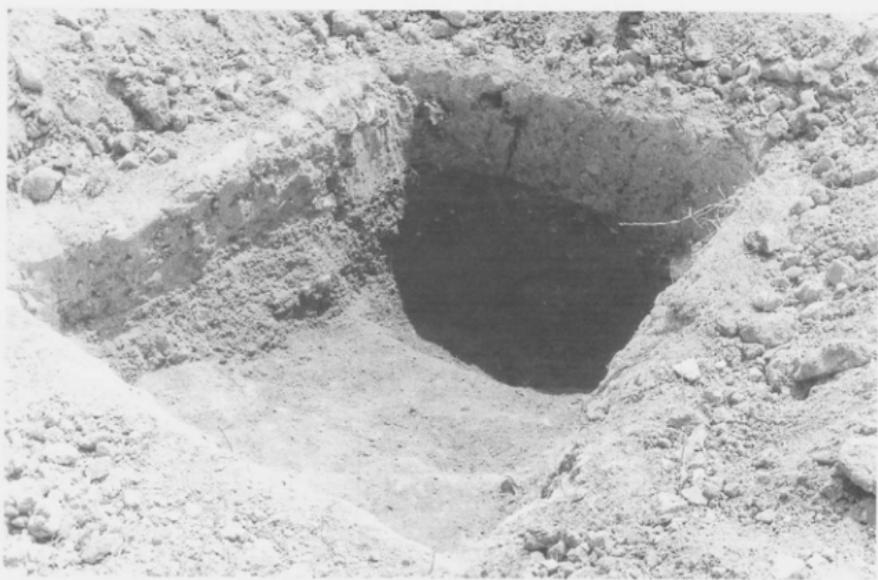


写真10 調査区全景

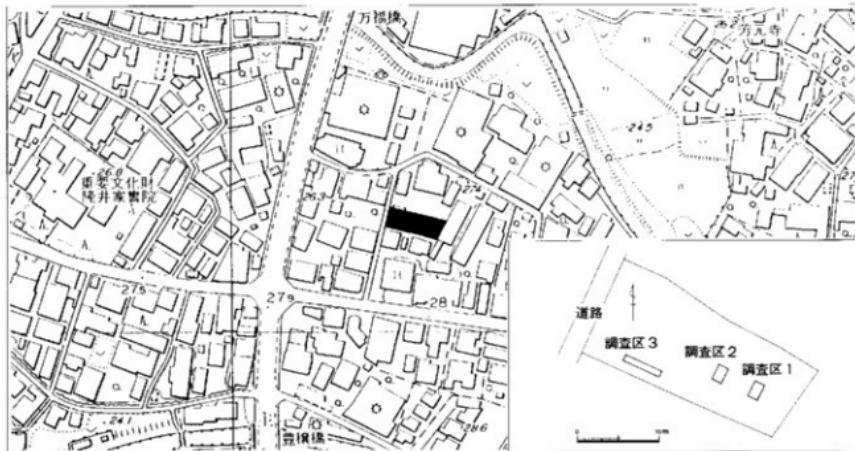
第7節 大久保C遺跡97-1の調査

調査地 大久保34-2

調査期間 平成9年10月22日～10月23日

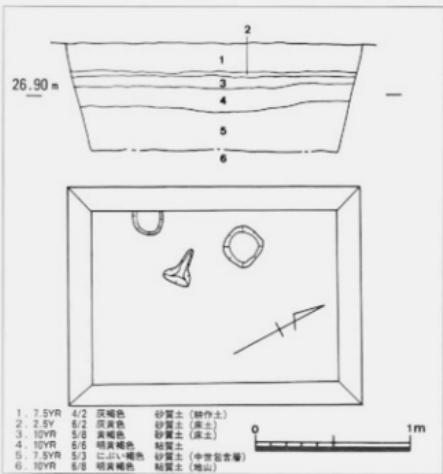
位置と環境 熊取町の北西部に位置する本遺跡は、雨山川と住吉川に挟まれた低位段丘上に立地する、大久保集落の民家が密集する地点に存在する。小字名は大中尻、垣花、垣内田、尻合等が残されており、今回の調査地点は大中尻である。本遺跡は、昭和60年の調査において、瓦器の破片等を含む中世の包含層が確認され、遺跡が存在することが周知されるようになった。しかし、今日まで中世遺跡として実態を把握できる成果は上がっていない。また当地は、西隣の降井家屋敷跡、約200m東に存在する中家住宅という熊取における近世の豪族であった両家に囲まれた位置にあり、これらの関係も含めて注目される遺跡でもある。

調査内容 調査は個人住宅の新築工事に伴うものであり、調査地に3ヶ所の調査区を設定し、人力掘削により実施した。確認した基本層序は、①耕作土・床上、②近世近代整地層、③中世包含層、④無遺物層であった。①は近年まで行われていた耕作土層で層厚は約20cm。②は10YR6/6明黄褐色の粘質土層で近世以降の陶器器が若干含まれていた。層厚は約15cm。③は7.5YR5/3にびい褐色砂質土層を呈し、層厚は約30cmを測る。特に本層下部に集中して14世紀頃を中心とする瓦器片や土師質土器が多数出土した。しかしいずれも細片化しており、摩耗も激しく、炭化できるものは僅かである。④は10YR6/8明黄褐色粘質土の地山であるが、柱穴もしくは杭穴と思われる遺構を4基検出している。これら遺構からも③層と同じく瓦器片等が出土していることから14世紀には埋没していたと考えられるが、これがどういった施設であったかは不明であると言わざるを得ない。

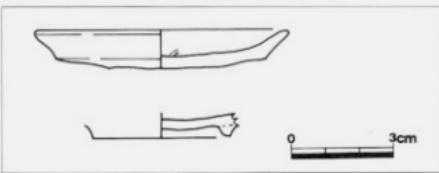


第22図 調査地点位置図 ($S=1/2,500$)

第23図 調査地点位置図



第24図 調査区2平面・断面図



第25図 出土遺物実測図



写真11 出土遺物



写真12 調査区全景

小 結 今回は個人住宅の新築工事に伴う調査ということで、開発深度も浅く、埋蔵文化財は保存されるという事で、部分調査に留めたため狭小な面積となってしまい、充分な成果を得るには至らなかったかもしれない。しかしこれまで、不明な部分が多くかった本遺跡の一端は窺い知れるものであったと思う。大久保という古くからの集落の中にあたるため乱開発を免れ、比較的良好な状態で遺跡が残されている事が判明し、また今後近隣で調査が実施され、徐々にでも当遺跡の性格等が明らかになることに期待したい。

第8節 東円寺跡97—13区の調査

調査地 野田2136—6

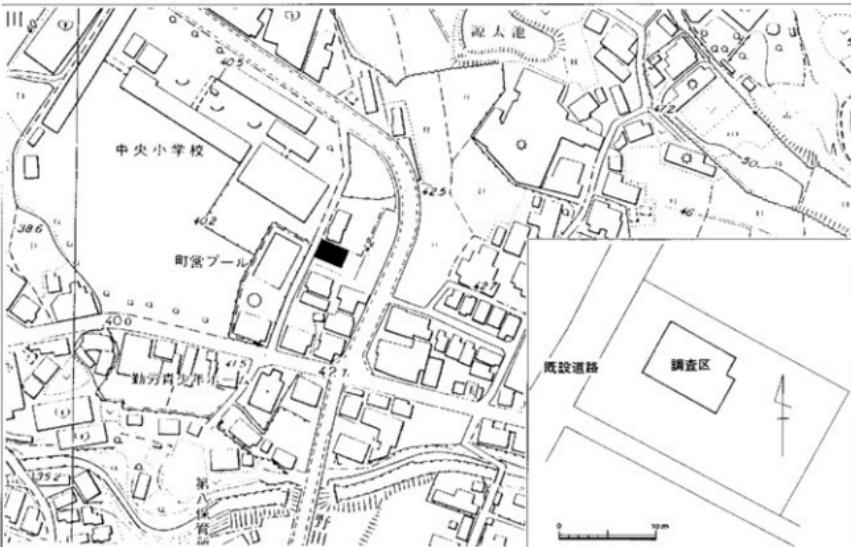
調査期間 平成9年12月9日～12月11日

位置と環境 本調査地点は、東円寺跡の東端に位置し、北側は丘陵への裾野で、南側を流れる大井出川に向かってその標高を下げ河岸段丘面にあたっている。当地東隣では、昭和63年に調査を実施し、土壙、柱穴、瓦器甕、瓦質甕、石臼等中世を中心とした遺構・遺物を検出している。

また、町道野田中央線を挟んだ東側の調査では、溝、柵列、建物跡、土壙等を多数検出し、遺物の量も非常に多く主に12～14世紀までの瓦器や上師質土器、常滑、東播系土器、紀州系土器、青磁、白磁、古錢等が出土している。また、当地の小字名は多々利と呼ばれ、鑄造関係の施設等が存在していたと考えられるが、これまで周辺地域で明瞭な遺構・遺物は確認していない。

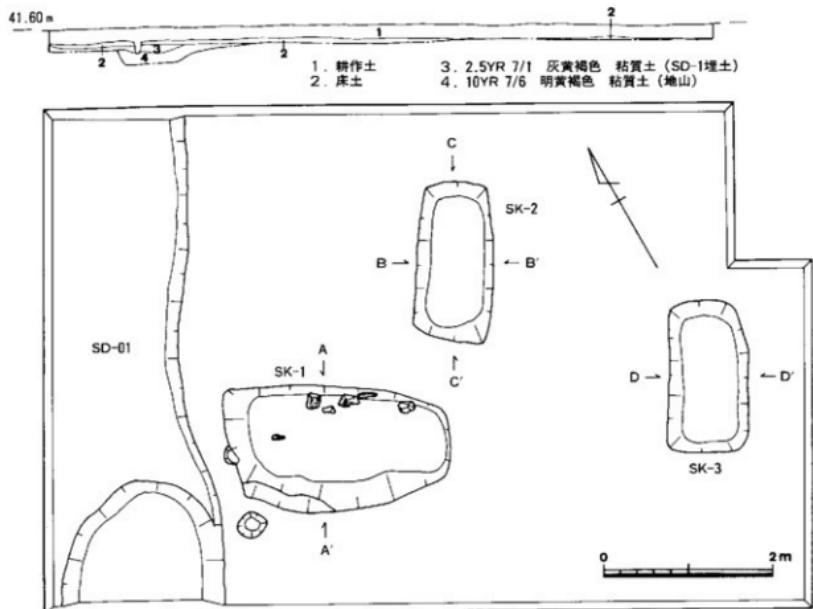
調査内容 調査対象地に 6×9 m の調査区を設定して、機械掘削により実施し、右図のような土層、遺構を確認できた。基本層序は、①層厚約25cmの耕作土・床土、その直下に②明黄褐色粘質土の無遺物層（地山）である。検出遺構は土壙（SK）3基、溝（SD）1条を地山面上より確認した。

SK 1は平面隅丸方形を呈し長辺2.7m、短辺1.6m、深さ0.4mを測る。断面は北・東・西ではほぼ垂直に落ち込み、南側では緩やかに切り下がっており、埋土は灰黄褐色粘質土で焼上・炭化物が特に、底面から5cm程上で多量に含まれている。また検出面より5cm下で人頭人の火を受けた自然礫を6個体検出した。遺物は須恵器甕片、土師質土器片、瓦器皿の小片を若干検出した。

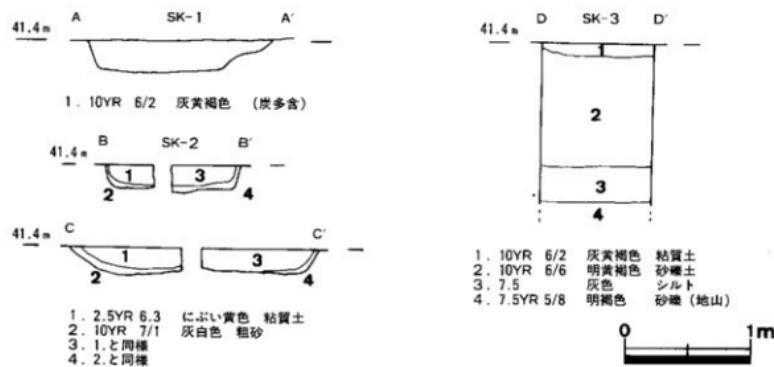


第26図 調査地点位置図 ($S = 1/2,500$)

第27図 調査地点位置図



第28図 調査区平面図・断面図



第29図 遺構断面図

SK 2 は隅丸方形で長辺2.0m、短辺1.0m、深さ0.2mを測る。断面は四面とも緩やかに落ち込む逆台形で、埋土はにぶい黄色粘質土の下に灰白色粗砂が敷き詰められたように広がっている。遺物等は一切出土していない。

SK 3 も同じく隅丸方形を呈し長辺1.9m、短辺1.0m、深さ1.3mを測る。断面は垂直もしくはやや外側に広がり、埋土は①灰黄褐色粘質土と②明黄褐色砂礫土、③灰色シルトで明黄褐色粘質土の地山を突き抜け、褐色砂礫層に達している。また遺物は一切検出していない。

SD 1 は溝としてとらえたが、西側の端を検出していないので不明確である。埋土は灰白色粘質土でマンガン斑を多量に含んでいる。またSK 1付近で焼土・炭化物が若干含まれている。出土遺物は土師質・須恵質土器、瓦器片が数片出土した。

これら土壤の時代は出土遺物より13世紀から14世紀が考えられるが、出土遺物量が少なく判断材料が乏しいので詳細は不明である。

小 結 今回の調査で明瞭な遺構、3基の上塙(SK)を検出した。これらの用途を考えてみると不明な点は多いが墓であることが一つ考えられる。SK 1 は他の二つより大きいが、SK 2・3 はともに平面的な大きさがおよそ2 m × 1 mで統一されているようであり、またSK 1 では焼土・炭化物が多量に含まれているほか、棺もしくは遺骸安置施設を思わせる列石があり、火葬土壤の可能性があると言える。他の、SK 2・3 は焼土等が含まれていないことから土葬墓であることが推測できる。またこれら3基の上塙の上軸はN-30°-E及び-30°-Sの方向をとっており、周辺十地区画の方向と合致し企画性を感じられる。また今回表層施設は全く確認できないが、それぞれ切り合いもなく、間隔が1~2 mと広いことから十まんじゅうのような施設の存在の可能性が考えられる。被葬者の問題であるが、当地点は「東円寺」推定地の東南東に100 mのところに存在し、東円寺との関係が当然考えられるが、推測の域をでない。

しかし、これら3基の土壤を墓と考えるには多少問題もある。それは①副葬品と思えるものが一切無いと言うこと、②有機質遺物(遺骸)や棺及びその金具等の痕跡が認められること、③SK 1において確認した人頭大の自然縛が検出面よりわずか5 cmほど下で検出したこと。つまり、これらの自然縛は遺骸等が焼却された後に土壤内に並べられたということになる。という問題が挙げられる。①についてはSK 1において若干の遺物を検出しているが、いずれも碎片であり副葬品と言えるものではない。ただ大阪府下周辺地域の調査例を見てみると中世の土壤墓において副葬品が確認される例は少なく、珍しいともいえる。本町においても成合寺遺跡における調査で600基以上の土葬墓と思われる土壤を検出されているが、そのうち副葬品と思われる遺物が出土したのはほんの僅かであったということもあり、この時代は副葬品を伴わないのが普通といえるようである。

以上のような問題が考えられ、墓とする確実な根拠が見当たらない。また当地に残された「タタリ」(たらら)と言う小字名から鋳造・製鍊関係の場であったとも考えられるが、これも鐵滓等関係遺物が出土していないので判断できない。現地点では判断材料が少なくこれ以上の言及は避けるが、いずれにしても今後の調査成果、類例を持ちたい。



写真13 調査区全景



写真14 SK - 1

第4章 おわりに

以上、東円寺跡、久保城跡、降井家屋敷跡、久保B遺跡、大久保C遺跡の5遺跡、8件の国庫・府費補助事業による発掘調査結果を述べてきた。

今回、久保城跡、久保B遺跡の2件に関しては、新たな知見は得られなかった。今後の調査に期待したい。

また、東円寺跡、降井家屋敷跡、大久保C遺跡の調査において今回、僅かではあるが遺構・遺物を検出し、その一端が窺える成果が得られたと思う。しかし、それはほんの断片に過ぎず、今すぐその歴史的意義等が論じられるものではなく、今後の調査の積み重ねによって序々に明らかにしていきたいと考えている。

熊取町が独自に発掘調査を実施するようになり13年が経過し、ようやく調査体制も整いつつあるが、諸遺跡の範囲・性格等の様相の把握が殆どできていないのが現状である。また当町には博物館等の調査成果を展示するような施設も無なく、啓蒙・啓発事業は殆ど実施できていない状況である。我々が行っている発掘調査は、全て開発行為に伴うものであり、遺跡の破壊を前提として行われているものである。重要な埋蔵文化財が発見されたとしても保存ができない限り破壊され、消滅することになり、またこういった活用が出来ないと同じ事と言えるでしょう。

このような状況の中、文化財調査体制の確立は当然ながら、遺跡各個の把握、文化財保護活動の浸透、文化財の保存・活用等、今後我々に課せられた問題は多い。

報告書抄録

ふりがな	くまとりちょういせきぐんはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	熊取町遺跡群発掘調査概要報告書							
卷次	XII							
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	前川淳、永井仁							
編集機関	熊取町教育委員会							
所在地	〒590-0495 大阪府泉南郡熊取町野山1丁目1番1号							
発行年月日	西暦 1998年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
東門寺跡 96-12区	市町村:遺跡番号 大阪府泉南郡 くまとりちゅうおおあざ 熊取町大字 こうや 辯屋12	27361	6	34° 24' 03"	135° 21' 23"	19970304 19970306	8	個人専用 住宅建築
久保城跡 97-1区	市町村:遺跡番号 大阪府泉南郡 くまとりちゅうおおあざ 熊取町大字 くぼ 久保12	27361	15	34° 23' 34"	135° 22' 24"	19970507	4.5	個人専用 住宅建築
東門寺跡 97-3区	市町村:遺跡番号 大阪府泉南郡 くまとりちゅうおおあざ 熊取町大字 こうや 五門1151-5	27361	6	34° 24' 06"	135° 21' 25"	19970520	4	個人専用 住宅建築
降井家屋敷跡 97-1区	市町村:遺跡番号 大阪府泉南郡 くまとりちゅうおおくぼ 熊取町大久保 なか 中2-17	27361	25	34° 23' 56"	135° 20' 55"	19970630 19970704	16	個人専用 住宅建築

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村:遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
とう さん じ 東円寺跡 97-5区	おおさかふくなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうふくや 熊取町紺屋 2-2091-7	27361	6	34° 24' 03"	135° 21' 18"	19970707 19970708	2	個人専用 住宅建築
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村:遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
くほ 久保B遺跡 97-1区	おおさかふくなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりしょうわわあざ 熊取町 大字 くほ 久保 1135-1	27361	38	34° 23' 24"	135° 22' 12"	19970821	3	個人専用 住宅建築
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村:遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
おねくほ 大久保C遺跡 97-1区	おおさかふくなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちよおおさ 熊取町 大字 おねくほ 大久保 135-1	27361	31	34° 23' 56"	135° 20' 55"	19971022 19971023	10	個人専用 住宅建築
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村:遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
とう さん じ 東円寺跡 97-13区	おおさかふくなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおさ 熊取町 大字 のぞ 野川 2136-6	27361	6	34° 24' 18"	135° 21' 12"	19971209 19971211	52	個人専用 住宅建築
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記	事項		
東円寺跡 96-12区	寺院跡							
久保城跡 97-1区	城郭跡							
東円寺跡 97-3区	寺院跡							
降井家屋敷跡 97-1区	屋敷跡 江戸～		井戸、土壙	近世陶磁器				
東円寺跡 97-5区	寺院跡							
久保B遺跡 97-1区	集落跡							
大久保C遺跡 97-1区	散布地 鎌倉～室町		柱穴、杭穴	瓦器、土師質上器				
東円寺跡 97-13区	寺院跡 鎌倉～室町		土壙、溝	須恵質、土師質土器 瓦器	土壙は墓の可能性あり。 副葬品はなし。			

熊取町埋蔵文化財調査報告 第30集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・ XII

発行 平成10年3月

発行・編集 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野田1丁目1番1号

印刷 摂河泉文庫

大阪府口塙市北町20-18